

ラヴェイルマルケとリユーゼル（四）

—いわゆる「バルザズ・ブレイス論争」について—

梁 川 英 俊

VII 憧憬から離反へ

リユーゼルとルナン

覚えていらつしやるでしょうか。去る寒い冬の一日、国立図書館であなたに『聖ノンの生涯』*Bäbe Santes Nonn*のブルトン語の写本を閲覧したいと申し出た人がいたことを。まったく思いもかけないこの申し出に、あなたの目が突然輝き帯び、血は騒ぎ、神秘的な声（血の声です）があなたにこう告げたのを。「この人はブルトン人だ。兄弟なのだ」*- benès so eur Breizard, - eur breur*。そして次の瞬間には、私たちの手はまるで本能によるかのように互いに触れあつたのです⁽¹⁾。

一八五八年三月二六日、リユーゼルがルナンに書き送った最初の手紙はこんな風に始まる。彼はこの長文の手紙のなか

ラヴェイルマルケとリユーゼル（四）

で、自分が長年ブルターニュ文学の研究に携わっており、かつその復興を目指していること、また母方の叔父がルユエルであり、『両世界評論』に掲載されたルナンの「ケルト民族の詩歌」を読んで以来、彼以外にルユエルの後継者たり得る人物はいないという確信を抱いていること、等を縷々として綴っていた。発信地はナント。リユーゼルは同年二月に、この町のリセの復習教師として赴任したばかりだったのである。

おそらくは叔父の死後、初めて理解者を得たという喜びもあったのだろう。この最初の手紙のなかで、リユーゼルはこの博識の同郷人に、ブルターニュ演劇とノルマンディーの詩との類似をいかに考えるべきか、またスペイン演劇との類似をどう考えるべきか、あるいはバス・ブルトン語とサンスクリット語をはじめとするオリエントの諸語との類似は何によるのか、等々重要な質問を矢継ぎ早に投げかけていた。

もつとも、ルナンが世を去る一八九二年まで三〇年以上にわたって続くこの往復書簡において、話題になったのはなにも学問的な事柄のみではなかった。リユーゼルはしばしばこの年少の同郷人に向かって、自分の身の上を吐露することをためらわなかった。たとえば一八五八年六月五日付の二通目の手紙で、早くも彼は自分の境遇についてこう訴えていた。「私が就いているのは、あらゆる職業のなかでももつともつましく、もつとも辛いものです。私は「生徒監督」なのです。私はもう三十六歳です。そして心のなかでこの境遇がいかに不安定でみじめなものであるかを思うとき、深い嫌悪感が私の全身を捉えるのです⁽²⁾」。

リユーゼルはこの不遇の原因をブルトン人の血に求めていた。「われわれブルトン人はこの人生の過酷な戦いには向いていません。そこでもつとも当たり前前に追求される目的は物質的なもの、つまりは富なのですから。(……) そのうえブルトン人は村を離れると、都会や文明化された社会のなかではまったく途方に暮れてしまうのです。そこでは民族や親族の精神はどんどん消え去り、皆はほとんど自分のためにしか働かず、他人を使うのはもっぱら私的な目的のため、いわば

自分の富の道具としてなのです。われわれは世知なるものにまったく疎いのです。少なくとも私はそうです。そして私の地位はその十分な証明なのです⁽³⁾。

ルナンにたいするリユーゼルのあけすけな態度には、疑いもなく互いにブルトン人であるという気安さがあった。しかも『ケルト民族の詩歌』の著者であるこの人は、誰よりもブルトン人の何たるかをよく知るはずの人だったのである。リユーゼルにとって、その胸の内を明かすのにこれほど相応しい相手もいなかった。一方、ルナンもまた郷土の研究に身を捧げようとしている同郷人にたいして、「あなたが自分の仕事にもっと多くの時間を割けるポストを得るために私に何かお役に立てることがあれば、どうぞ使ってください⁽⁴⁾」と申し出るなど、最初から助力を惜しまなかった。

しかし、リユーゼルの教師人生はその後も転変を繰り返す。ルナンへの最初の手紙からわずか六ヶ月後の一八五八年十月、彼はナントの生徒監督の地位を捨て、レンヌの県庁の職員になる⁽⁵⁾。もっともこれも長続きはせず、二年後の一八六〇年には再び教職に戻り、第五学年の教師としてカンペールのコレージュに赴任するが、そのわずか二年後には、今度は唐突にランデルノーのコレージュへと転任を命じられている。書簡はこう語る。

ある日学校に行くと、『公教育報』の最新号に、私が第七および第八学年の教師としてランデルノーに赴任すると書かれているということを生徒たちから聞きました。私は一笑に付しました。それほどあり得ないことに思われたからです。(……) 授業の後、校長―小心者でこびへつらう人物ですが―の部屋に呼ばれ、公報にある嬉しくない知らせを読まされました。私は説明を求めました。彼は大学区視学のところへ行ってくれと言いました。大学区視学はぼそぼそと幾つかの理由を口にしました。もっとも重大な理由は(……) 私が生徒たちからちよつとした感謝のしるしを受け取ったから、ということでした。(……) 他の理由もありました。駐屯地の將校たちのもとを訪れるとか(……)、カフェに

行くとか、上司に会つても挨拶しないときがあるとか、教会に行かないとか、写真を撮つたり、詩を書いたり、ブルターニュ文学に関わっているとかです。(……) 度重なる懇請がありました。私はランデルノー行きを固辞しました。以来、辞表を出したわけでもないのに休職状態になっており、いまは街から離れてプルアレにある私の姉妹たちの家で失意の日々を送っているのです(6)。

リューゼルにとって、ディナンのコレージュに次いで二度目となる学校側とのトラブルだった(7)。そしてこの出来事は、彼が当時の教師のなかでいかに異質な存在であるかを示していた。第二帝政末期のこの時代、教職とブルターニュ文学の研究を両立させることは、けつして容易ではなかったのである。「私は教育の仕事を諦めた方がいいのかもしれませんが。私にはあまりにも独立心がありすぎるのです」と、彼は同じ手紙のなかで付け加えていた。

ともあれ、リューゼルはこうした出来事の一部始終を、律儀にルナンに向けて伝えていた。そしてその姿勢は、のちに彼らの間で、ラヴィルマルケや『バルザズ・ブレイス』が頻繁に話題に上るようになってからも変わらなかった。二人の往復書簡が、「バルザズ・ブレイス論争」の具体的な様相を詳細に伝える、ほとんど唯一とも言える貴重な記録となったのもそのためだった。

では、そこから窺えるこの論争の真相とは、いかなるものだったのか。

ラヴィルマルケの心酔者

「貴殿の『バルザズ・ブレイス』は私が生まれてこの方もっとも称賛してきたもののひとつで(……)、ほかのどんな言語で書かれた本であれ、私にとってこれに勝るものはありません」。一八六一年四月、ラヴィルマルケから賞賛の手

紙を受け取ったリューゼルは、自らの『バルザズ・ブレイス』への心酔ぶりを著者にこう書き送った。そればかりではない。この手紙がよほど嬉しかったのだろう。彼はその後ほどなく、次のような言葉で始まる一篇のソネもものしていたのである。

ムツシユー・エルサール、バルドよ、いまだ拝顔にあずからぬが、

しかし私はあなたを愛す、ブルターニユであれフランスであれ、

人が私の前で、なんであれ一冊の本を褒めそやすところでは。

たちまち私は、『バルザズ・ブレイス』を読め！　と言う。⁽⁸⁰⁾

後年のリューゼルを知る人には意外なことに、この時代の彼は、紛れもなくラヴィルマルケとその『バルザズ・ブレイス』の熱烈な賛美者であった。しかもその心酔は、昨日今日始まったものではなく、すでに何年も前から続く筋金入りのものだったのである。たとえば、この詩が書かれる八年前、彼がまだデイナンのコレージュにいた一八五〇年頃に執筆された、未発表の『バルザズ・ブレイス』論には次のようにある。

私以上に『バルザズ・ブレイス』を愛し、心酔している者はいない。(……) このド・ラヴィルマルケ氏の書物にはある深刻な批判が向けられており、それは文学界ではある種の信用を獲得しているかに思えるが、私がそれについて一言する機会をもてるのは嬉しいことだ。作者が本物とする歌、そこで歌われる出来事が起こった時とほぼつねに同時代に作られたとされる歌が、全てとは言わずとも、部分的には作り物だということ、ひとは著者を非難してきた。(……)

しかし、古のブルターニュ文学の研究に長年たずさわり、とりわけ民衆歌を研究している身としては、こうした非難は的外れであるとはつきりと主張することができる。だからといって、彼がオリジナルの表現に手を加えたり、フランス語風になっていた単語を昔のケルト語に戻したり、都合の悪い（とはいえ、めったにないが）詩句や詩節を直したりしなかったと言っているわけではない。だが、それだけだ。（……）私は調査に乗り出した。一度ならず、ド・ラヴィルマルケ氏と同じ筋に当ることもあったが、彼がまったく当らなかつた筋から汲むことの方が多かつた……。だから断言できるのだが、比べてみると『バルザズ・ブレイス』のテキストが、いかに忠実に復元されているかに驚くのである⁽⁹⁾。

見ての通り、リューゼルの『バルザズ・ブレイス』への称賛は、たんなる愛読者のそれではなかつた。それは同じ歌の収集に携わる収集家としての、いわば「現場」からの発言だったのである。しかも、そうした立場から、彼は当時すでに疑惑のなかにあつたこの書物の真正性を積極的に擁護してもいたのである⁽¹⁰⁾。この姿勢がいかに強固なものであつたかは、たとえばその八年後の一八五八年十月に『ラ・ルヴェ・フランセーズ』*La Revue Française* 誌上に発表された「ブルターニュの詩歌―グウェルスとソーン」*Poésie Bretonne, Gwerz-Sones* を見ればいい。そこで彼は「ノミノエの租税」や「モルヴァン・レズ・ブレイス」などの作品を称賛しながら、「私は自分自身でも、ときに若干の相違はあつたが、ド・ラヴィルマルケ氏が出版した歌の大半を集めたのだ⁽¹¹⁾」と断言し、その真正性に太鼓判を押していた。しかも、ここでリューゼルの擁護した「ノミノエの租税」を始めとする諸作品こそは、のちに彼自身が贋作の代表として指摘することになる作品にほかならなかつたのである。要するに、この時代のリューゼルは、後年彼が取ることになる立場とは、正反対の場所にあった。ラヴィルマルケの手紙に興奮を抑えきれなかつたのも、いわば当然のことだったのである。

ところで、この年彼がラヴィルマルケから受け取っていたのは手紙ばかりではなかつた。そこにはいまひとつの贈り物

があつた。それは、ラヴィルマルケが主宰する「ブルターニュ協会」*Breizh-Breiz*なる団体の免状であつた。免状の文面には、すべてブルトン語で、こう書かれていた。

余は、「ブルターニュ協会」の「指導者」、「言語」の「大教師」、「レジョン・ドヌール勲章騎士章」の受勲者等として、以下の文を読む者に、健康と幸福と、なかんづく不純な「ブルトン語」にたいする激烈なる嫌悪のあらんことを願う。

信頼に足る数多の人々が、〇〇(氏)は、達意にして、かつフランス語を一語も含まぬ見事なブルトン語で、一語一語自らの考えを伝え得る、卓越した演説家であることを余に保証したので、余はこの者を〇〇と命名したく、かつ当文書をもつてかく命名することとし、よつて街の広場であろうが、田舎道であろうが、この者の歩むところではどこであれ、その前に身を屈めるよう皆に命ずるものである。なお、何者かが無知ゆえにこの行為を怠ることのなきよう、この文書がただちにブルターニュ全土において、その役目を負う者の手によつて公にされんことを希望する。

〇年〇月〇日、カンペルレの館にて記す。

会長 ケルマルケル⁽¹²⁾

ラヴィルマルケは少なくとも一八五〇年代の後半から、同様の免状を、自らの命名になるバルドの称号を添えて、これかと思ふブルトン語の書き手に送っていた。ちなみに、リユーゼルが受け取つた称号は「トレゴール地方のバルド」*Barz Treger*であつた。もつとも、免状のもつたいぶつた調子とは裏腹に、それが入会を保証する肝心の「ブルターニュ協会」

の方は、なんら実体のある組織ではなかった。それゆえ、せつかくの免状もただラヴィルマルケから与えられたお墨付きを意味するだけで、それ以上の価値をもつことはなかった。しかも、一読すれば分かるように、そこに書かれている内容は明らかに生真面目に解釈すべき性質のものではなかったのである。

しかし、ラヴィルマルケの心酔者であったリューゼルは、それをひたすら真面目に受け取った。彼は恐縮してこう礼状を認める。「こうしたご高配をどんなに私が有り難く思っているかは筆舌に尽くし難いものがあります。どうぞ私の感謝の気持ちをお受け取りいただければと思います。ただひとつ気がかりなことがあるとすれば、それは私がこのような称号に値するようなことをしたのか、また今後それに相応しいことができるのかということでもあります⁽¹³⁾」。

ところが、リューゼルへの免状の授与は、これ一度に止まらなかった。二年後、彼は再び同様の免状を受け取る。ちょうど詩集『つねにブルトン人』*Bepred Breizad*を上梓したばかりの頃であった。その免状を届けてくれた友人のルスクル *Le Scour* に、彼はこう書いている。

すでに四年前、私は「トレゴール地方のバルド」という称号で、ラヴィルマルケ氏から「バルドの免状」をいただいています。あなたがもっていらした免状をいただければ、重複することになるのではないのでしょうか。「ブルトン語の大教師にして添削者」*Arc'hekelenner reizer war ar brezounek* という称号はどういう意味ですか。本音を言えば、ただ「トレゴール地方のバルド」と呼ばれていた方がまだましだったのですが。(……)こんなつまらない称号を真に受けていたら、そのうち皆に嘲笑されるのではないかと少々心配です⁽¹⁴⁾。

ここには二年前にラヴィルマルケの前でひたすら恐縮していた人物の姿はない。彼の姿勢は、この二年間で明らかに変

化していたのである。では、その変化の原因は何だったのか。わずか二年の間に、彼のうちでいったい何が起こったのだろうか。

「聖トリフィーヌ事件」

リューゼルの変化の直接のきっかけとなったのは、彼が所有する一冊の写本をめぐって、ラヴィルマルケとの間に起こったひとつの事件であった。その経緯はリューゼルがルナンに宛てた一八六三年十一月六日付の書簡で、詳細に伝えられている。以下、多少長くなるのを承知の上で、その一部を引いてみよう。

私の友人でカンペルレに住む医者先生の先生が、ある日カンペルの私の家にやって来て、私の古い写本に目を留め、それをアンリ神父に見せるから貸してくれと言うのです（彼はとても喜ぶだろう、と言うのです）。私は快く承諾し、彼は『聖トリフィーヌ』の写本（un manuscrit）をもっていきます。数日後、ラヴィルマルケ氏がアンリ神父の家に赴きます。たぶんご存じではないと思いますが、ブルトン語に関しては、ラヴィルマルケ氏はアンリ神父（彼はまさに謙虚そのものといった人ですが）なしには何もできないのです。オリジナルと異なるものになっていた『バルザズ・ブレイス』のテキストを復元したのも彼ですし、翻訳もほとんど彼がやっています。バルド（貴殿のアカデミーの同僚がフィニステール県で呼ばれている名前に従えばですが）の監視の下、彼の代りに、です。

こうして、ラヴィルマルケ氏はアンリ神父の家に赴きます。私の古いブルトン語の写本を眺め、ばらばらとめくり、我を忘れ、感きわまってそれを持ち去ります。それなのに友人の医者は、私にこう書いてくるのです。アンリ神父はラヴィルマルケ氏のために写本を筆写するのに忙しく、またラヴィルマルケ氏は私のことなどおかまいなしに、このブル

ターニユの聖史劇を翻訳・出版するつもりでいる、と。これを知った私は抗議し、何度も手紙を書いて写本を取り戻そうとしました。しかし、それも無駄です。この人食い鬼は獲物を手離そうとはしませんでした。ならば彼の家に執達吏を送るぞ、と私はその医者友人に言いました。友人は友人で、かわいそうな神父をどやしつけ、彼の前で執達吏や帝
国検事の名前を引き合いに出し、信用の濫用の咎で訴えられるぞと言います。人の善い神父は身震いします。そして、彼にたいして不誠実な行いをしようとしていたラヴィルマルケ氏の命令に背いて、私の写本を自ら取った写しとともに私のところに送り返してきます。すぐに印刷が始まります。しかし怒り心頭の大バルド様は、憤怒に駆られてわれわれを脅迫するのです。彼は今後自分の許可なくわれわれがブルトン語で出版するものをすべて貶してやると言い、加えてわれわれが出版するよりも先に、別のやり方で『聖トリフィーヌ』を出版するつもりだと宣言します。けれども、いかなる算段をしたところで、写本を手に入れることはできません。彼は自分の脅しを引つ込めなければならなくなります。というわけで、われわれはこの怒り狂った鬼のために過酷な労働を強いられました。私はブルトン語のテキストを書き写し、それをフランス語に訳し、序文を書きました。原稿は出来上がった端から印刷され、ほとんど校正刷りにも目を通すこともできませんでした。ブルトン語はアンリ神父が手直ししてくれました⁽¹⁵⁾。

見ての通り、ラヴィルマルケとの争いの原因となったのは、『聖トリフィーヌとアーサー王』の写本であった。リユールは当時、この演劇の校訂本を作成しようとしており、そのために七冊の写本を手に入れていたのである。なかでももっとも貴重だったのは、生まれ故郷プルアレのパン職人ジャン・ルメナジェ Jean Le Menager が筆写した写本であった。民衆劇の俳優でもあったこの人は、ブルターニユの聖史劇の写本を多数所有しており、リユールはその幾つかを彼の息子を通じて手に入れていたのである。この書簡で単数形で語られている「写本」も、おそらくはこのルメナジェの手になる

ものに相違なかつた。そして、文面から判断する限り、どうやらリユーゼルとラヴィルマルケはこの貴重な写本をめぐつて主導権争いを繰り広げたらしい。もつとも、そこで具体的に何が起きたのかを知ることは、さほど重要ではない。重要なのはむしろ、この出来事をきっかけにして、リユーゼルの意識にどのような変化が生じたのかという、そのことの方である。

さて、それまでのリユーゼルにとって、ラヴィルマルケとはいかなる人物だったか。いうまでもなく、長年の称賛の対象である『バルザズ・ブレイス』の著者であり、ブルターニュ文学研究の信頼すべき庇護者であつた。しかしこの事件は、リユーゼルに、それが彼の思い込みである可能性を示唆する。つまり、彼はここで初めて、ラヴィルマルケを自分と同じ土俵上の競争者として意識するのである。しかも、彼と比べて社会的な信頼もはるかに厚く、名声においても比較にならぬほど大きな競争者として。この事實は、それまでラヴィルマルケに依存する部分が大きかつたリユーゼルには、容易には受け入れ難いものであつたに相違ない。少なくとも、この書簡はその動揺を素直に伝えている。以後しばらく、ラヴィルマルケは彼にとって、庇護者であり競争者であるという不安定な位置にあり続けることだろう。

一方、この書簡でいまひとつ注目しなければならないのは、アンリ神父への言及である。既に触れたように、このカンペルレの救済院の司祭は、二十年来ラヴィルマルケのブルトン語純化運動の重要な協力者であつた⁽¹⁵⁾。その彼について、リユーゼルはここで、ことブルトン語に関して、ラヴィルマルケは彼なしには何もできず、『バルザズ・ブレイス』のブルトン語テキストや翻訳の大半も彼の手になるものだ、と断言していたのである。

それにしても、彼は何を根拠にこのようなことを言っていたのか。アンリ神父から直接聞いたのか。あるいは、当時彼の周囲でそのような噂があつたのか。いや、そもそもそれ以前に、彼はなぜアンリ神父の協力を必要としなければならなかつたのか⁽¹⁶⁾。疑問は尽きないが、いずれにせよ写本をめぐるラヴィルマルケとの確執は、リユーゼルに彼の仕事にたい

する根本的な疑念を抱かせることになるのである。以前はあれほど評価していたその仕事に、である。

ともあれ、ラヴィルマルケの「脅し」は、リユーゼルの仕事を加速させた。『聖トリフィーヌ』の校訂本は、先に引いた手紙が書かれたのと同年の一八六三年に出版される。リユーゼルの少年時代に、故郷プルアレの隣村ヴュー・マルシエでこの劇が上演されてから、実に三十一年目のことであった。冒頭には、ブルターニュ演劇を詳細に論じた、彼自身の手になる四十四ページの「序文」*introduction*が付けられた¹⁸。加えて言えば、同じ時期に、リユーゼルはもう一冊の本の出版にも携わっていた。『イギリス憲法の歴史』*L'Histoire de la Constitution anglaise*と題されたその書物は、亡き叔父ルユエルの遺稿集であった。つまり、リユーゼルはこの年、彼にとっていわば積年の課題でもあった二つの仕事に、曲りなりにも形を与えたのである。

ところで、この『聖トリフィーヌ』の出版はまた、彼に願ってもない恩恵をもたらすことにもなった。というのも、この出版をきっかけとして、公教育相からブルトン語による「聖史劇」の写本と印刷本の調査のための助成金が支給されることになったからである¹⁹。収集旅行は一八六四年と六五年の二度に渡って行われ、その足跡は故郷のトレゴール地方はもちろん、レオン、モルビアン、フィニステールの各地方にも及んだ。のちに彼自身が「幸福な時²⁰」と呼ぶことになるこの旅行がいかに実り多いものであったかは、弟子のアナトール・ルブラスによって死後に公にされた『旅日記』*Journal de route*²¹が愉悦的な調子で伝えている。『聖トリフィーヌ』の校訂本がもたらしたのは、ラヴィルマルケとの確執という不快な思い出ばかりではなかったのである。

離反へ

いずれにせよ、この事件はこの二人の關係に決定的な転機をもたらした。以後、リユーゼルはラヴィルマルケへの警戒

心を隠そうとはしなくなる。現に、公教育相からの助成金の獲得を伝えた一八六四年一月のルナン宛ての書簡では、「この件に関しては、ラヴィルマルケ氏の世話にならずに済んだので、とりわけ気分がいいのです⁽²²⁾」と言われ、同年九月の日付をもつ同ルナン宛ての書簡でも、調査結果の価値を判断するために組織されるはずの「委員会」が話題にされ、こう書かれていた。

ド・ラヴィルマルケ氏はこの分野でもっとも能力のある者として、間違いなくこの委員会に加わるでしょう（もし貴殿がメンバーになるなら話は別ですが）。さて、私は『聖トリフィーヌ』の事件以来、大バルド様の厚遇を期待するわけにはいかない理由があります。そもそもこの人は私が彼の助けを求めず、その栄光の傘下に入らないのを許さないのです。そればかりではありません。随分前に、この人は新聞や雑誌を使って、自分が「ブルターニュ演劇」に関する「大仕事」に専念していると報道させていましたが、私が確かな筋から掴んでいるところでは、この人はこの研究を企てるために必要な資料や素養をもっておりませんし、加えてこれまでブルターニュの古い聖史劇の幾つかの写本を手に入れようとして、いまだに果たせていないのです。というわけで、私が懸念しているのは、彼が真つ先に私の研究の成果を利用して、予告した「大仕事」を成し遂げてしまうのではないかということなのです⁽²³⁾。

リユーゼルにとってラヴィルマルケは、いまやその仕事の進捗状況や資料の多寡が気になる競争者であった。もともと、彼がいかにその影響の及ばぬところで仕事をしたいと望んだところで、ブルターニュ文学の研究に関わる限り、それは不可能に近かった。というよりも、そもそもこの当時のリユーゼルは、ラヴィルマルケと完全に袂を分かつことなど望んではいなかったのである。

その証拠に、翌一八六五年に彼が刊行した仏語対訳付のブルトン語詩集『つねにブルトン人』*Bepred Breizad-Toujours Breton* を紐解こう。そのなかの一篇「刈り入れ人の朝の祈り」*Peden ar Mederrien, euz ar minin* は、冒頭に「バス・ブルターニユのバルド、テオドール・ケルマルケル氏に⁽²⁴⁾」*Da Varz Breiz-Izell, an Aotro Th. Kermarker* という献辞が掲げられ、ラヴィルマルケに捧げられていた。しかも、その結びの詩句には、「私はつねにブルトン人なのだ」(*Me zo bepred Breizad!*)⁽²⁵⁾とあり、詩集のタイトルまでが含まれていた。つまりリユーゼルは、この詩集全体のなかで疑いもなくもつとも重要な一篇を、ラヴィルマルケに捧げていたのである。のみならず、この詩集を彼に献本するにあたって、リユーゼルはそこに手紙を添え、こう記してもいた。「私のブルトン語の詩集が貴殿の惜しめない称賛を得られれば幸甚に存じます。貴殿からの評価を、首を長くして待っております⁽²⁶⁾」。

むろん、リユーゼルは「聖トリフィーヌ事件」を忘れたわけではなかったろう。にもかかわらず、彼はその詩集の出版にあたってラヴィルマルケに特別な敬意を払ったのである。論敵から「カメレオン」と呼ばれた、彼の優柔不断な態度の一端をそこに見るべきだろうか⁽²⁷⁾。あるいは、ラヴィルマルケとの関係を修復しようという隠された意図でもあったのだろうか。いずれにせよ、この詩集がラヴィルマルケを意識して編まれたものであることは、冒頭に彼が称賛した詩篇「バス・ブルターニユ」*Breiz-Izell* が置かれていたことから明らかであった。

しかし、こうした気遣いにもかかわらず、皮肉なことに、この詩集は二人の溝をさらに深める原因となってしまった。理由は、なによりもまずラヴィルマルケの態度にあった。リユーゼルは一八六五年二月五日付のルスクール宛の手紙でこう書いている。「私は方々から私の本について幾つかの手紙を受け取りました。すべてが称賛の手紙でした。中に一通だけその冷たさと控えめさで際立っているものがありました。それが大バルド様、「会長」*Penn-Sturier* のものであることは、わざわざ言わなくてもお分かりでしょう。彼は「ご親切に書籍を送っていただき」と感謝してはおりましたが、称賛の言

葉はひと言もありませんでした⁽²⁸⁾。

おそらく、この態度が直接の引き金となったのだろう。以後、リユーゼルの「大バルド様」にたいする姿勢は、急速に硬化していく。五カ月後、彼はルナンにこう語る。

私のささやかな書物は大方好意的に迎えられております。ただしブルターニュ文学の偉大なるラマ、彼が自称するところに従えば「会長」Penn-sturierは、それにたいして尊大な軽蔑を守っておりますし、その存在すら関知しないという様なのです⁽²⁹⁾。(……) たぶん彼は誰かがブルトン語で発表するときには、必ず自分の庇護を受け、自分の「ビザ」をもっていてほしいのでしょう。一方、私の方は無理やり押し付けられる庇護など受けたくもありません。自分ができるところをやるつもりですが、彼の手など借りずにいたいです。私は『聖トリフィーヌ』の出版のときの私にたいする彼のやり口を忘れることができません。そのとき彼はこんな御大そうな文句を口にしたのです。「私の世話になりたくないだって？　そうか、それじゃあいつがこれから出すものは、全部貶してやる！」あの人は近々、帝国図書館で掘り出した古い印刷本による『受難劇』を出版するはずです。冬の間、ずっとカンペルレで過ごして、アンリ神父にそれを翻訳させていました。というのも、自分ではできないからです⁽³⁰⁾。

リユーゼルの不信感は募る一方だった。が、それにしても、ラヴィルマルケは本当にこの手紙に書かれているような言葉の口にしたのだろうか。文面から判断する限り、リユーゼル自身、それを伝聞で知ったらしい。いずれにせよ、彼はラヴィルマルケが実際にその言葉を口にしたと信じた。しかも、この人間的な信頼の失墜の背景には、また学問的な信頼の失墜が伴っていった。ラヴィルマルケのブルトン語能力の貧弱さは、もはや疑うべくもない事実だったのである。そして、

そうである以上、その代表作である『バルザズ・ブレイス』の真偽性が問題になるのは、もはや時間の問題と言つてもよかつた。

『イエスの大受難劇』

リューゼルが先の手紙で出版を予告したラヴィルマルケの『受難劇』は、その手紙が書かれたのと同じ一八六五年に、『イエスの大受難劇』*Le Grand Mystère de Jésus* というタイトルで世に出る。「序文」*Preface*の冒頭で、著者はこう述べる。「この書物は私のケルト民族の詩歌に関する研究を補完するものである。『バルザズ・ブレイス』（ブルトン語の民衆歌）と『ブルターニュのバルドたち』で、私は田舎風の詩と彫啄された詩という二つの形式で、彼らの詩的天才を概観しようとした。『円卓物語』と『古代ブリトン人の民話』および『マイルデインあるいは魔術師メルラン』では、彼らの物語における才能を評価しようとした。『ケルト伝承』や『修道院の詩歌』では、彼らの宗教叙事詩の業績を素描した。ここではようやく私は彼らの劇作品を扱うのである^{〔31〕}。

ブルターニュ演劇の研究は、ラヴィルマルケにとって必ずしも重要な意味をもつ仕事ではなく、いわば落穂拾いにすぎなかつた。では、なぜそれは彼の関心を惹き得なかつたのか。「序文」に続く「ケルト民族における演劇」*Le théâtre chez les nations celtiques*と題された長文の解説のなかで^{〔32〕}、ラヴィルマルケはこう書いている。

ブルターニュ地方のバルドたちは、死後に彼らの才能の記念碑以上に、より多く信仰のそれを残すことを望んだ。しかしながら、この信仰が輝き、十四世紀のカトリックとブルターニュの魂が比類なくうち震えるナショナルな靈感の琴線がもしあるとすれば、それはこの時代の演劇なのである。(……)しかし十七世紀になると、それは王室の威光の下

で色褪せてしまい、司教や騎士を軽蔑する末裔たちの手によって幾多の野蛮な陳腐さにまみれ、それを若返らせるといふ目的で採用した手本を下手糞に模倣する、安手なガラス細工と成果ててしまったのである。

十八世紀の街の場末で、職人の間で流行し、高等法院が取り締まる必要もなかったような、現在の哀れなまがいものに至っては、ほとんど論評にも値しない⁽³³⁾。

見ての通り、ラヴィルマルケがブルターニュ演劇に無関心であったのは、それがひとえに彼の関心を惹くに足る魅力をもたなかったからであった。彼にとつて、その最盛期はすでに何世紀も前に過ぎ去ってしまったのであり、いま残っているのはいわば残骸にすぎなかったのである。では、にもかかわらず、なぜ彼はその研究に手を染めたのか。それは疑いもなく、リユーゼルの仕事にたいする対抗心からであった。もちろん、そこには、自分がブルターニュにおけるケルト学の第一人者であるという自負もあったかもしれない。しかし、ここでそれ以上に大きかったのは、いわば二人を隔てる価値観の相違であった。ラヴィルマルケが自ら受難劇を世に問わざるを得なくなったのは、なによりもそのためだったのである。

このことをはっきりと示すのは、両者の書物の冒頭に置かれた長文の論考——リユーゼルの場合は「序文」、ラヴィルマルケの場合は「ケルト民族における演劇」——である。一読して明らかのように、ラヴィルマルケがとりわけ力を入れて論じたのは、自らが選択したテキストの年代確定の問題であった。彼は種々の歴史的事実を参照しながら、その成立時期を一三六五年頃であると推定し⁽³⁴⁾、こう語っていた。「今日の歴史学の現状では、形式や文体が古いもの、牛皮紙に書かれた古い写本やゴシック体の活字で印刷物として残ったもの、あるいはまったくもって粗野で、飾らず、天真爛漫で、伝統的で、かつ簡素なもののみが、真に尊重と関心に値するものなのである⁽³⁵⁾」。

一見客観的なこの記述は、しかし実際には直接リューゼルの校訂本を狙っていた。というのも、著者はそこに脚注を付けて、こう書いていたからである。「私は尊敬すべき教師リューゼルが、現代ブルトン語研究に深い学識をもつアンリ神父の協力を得て最近出版した、『聖トリフィーンヌとアーサー王の聖史劇』については例外としたい。残念ながら、彼らが公にしたテキストは十八世紀以前には遡らないが⁽³⁶⁾」。

見ての通り、著者のリューゼルにたいする称賛には留保が付いていた。しかも、その留保は明らかに不当なものであった。というのも、ラヴィルマルケが「十八世紀以前には遡らない」とした『聖トリフィーンヌ』のテキストは、リューゼル自身が「序文」のなかで述べていたように、実際にはその起源を辿ることなど不可能なものだったからである⁽³⁷⁾。それゆえこの発言は、その成立が十四世紀まで遡る自らの書物の価値を強調しながら、逆にリューゼルの仕事を貶めようとするものだと思われるも仕方がなかった。しかもこの批判は、リューゼルの側から見れば明らかに的外していた。というのも、彼にとって、テキストの選択基準は古さにはなかったからである。彼は「序文」にこう書いている。

われわれがブルターニュの聖史劇の典型として聖トリフィーンヌを選んだのは、この作品がわれわれの所有する他の写本に比べて、文学的に価値があるとか、歴史的観点から見て重要だと考えたからではない。そうではなく、それが『エモンの四人の息子』*Quatre fils d'Aymon*と同様、ブルターニュ演劇の他のどの作品よりも、ドムノネでよく知られ、よく上演される作品だからである⁽³⁸⁾。

つまり、リューゼルがこの校訂本で残そうとしたのは、民衆文化としてのブルターニュ演劇のありのままの姿だったのである。むしろ彼は演劇がブルターニュ文学を代表するほど優れたジャンルでないことや、その内容がケルトの古代を反

映したものでないことは、十分に承知していた。しかし彼にとってブルターニュ演劇の魅力は、テキストの古さや、ましてやそれが伝える宗教的・民族的栄光のうちにはなく、その民衆的な性質そのもののうちにあった。その証拠に、リュールが「序文」で強調したのは、その上演がいかにも祝祭的で、民衆がいかにも協力的であったかということであり、文中で長々と引用してみせたのも、劇中の主要な台詞ではなく、役者が民衆に直接語りかける「前口上」や「納め口上」の方だったのである。いうなれば、ラヴィルマルケにとっての「哀れなまがいのもの」こそが、リュールにとってこの上もなく貴重なものだったのである。要するに、ブルターニュ演劇という同一の対象のなかにこの二人が見ていたものは、いわば正反対のものだったのである。

いずれにせよ、ブルターニュの民衆劇をめぐる対立は、リュールのラヴィルマルケにたいする反感をいやがうえにも掻き立てた。なによりも、その後の彼の行動が、それを雄弁に語っている。

「ブルターニュ協会」

一八六六年八月六日、リュールはルナンに「ひとつ助言をお願いしてよろしいでしょうか」と尋ねてから、こう切り出す。

十五年、あるいはそれ以上前から（たぶんご存知ないと思いますが）、*Brevez-Breiz* という名の「ブルターニュ委員会」ないしは「ブルターニュ協会」とでも呼ぶべき組織があります。ブルターニュ研究を後押しし、行方の知れぬ古のブルターニュ文学の作品を調査かつ証明し、今日かってないほどの危機にあるかに見えるこの言語を能うる限り滅亡から救うために創設された「らしい」のです。ド・ラヴィルマルケ氏が *Penn-sturier* すなわち「会長」あるいは「長」

なる肩書きで、自称ナショナルなこの協会の責任者を務めています。メンバーはあちこちに散らばっていますが、互いに知らないか、あるいは知っているとしても名前だけです。大半の会員にとって、「会長」自身がまさに神話なのです。なにしろこの人は、擁護という使命のために会員が獲得するはずの利益について話し合うべく会員を招集したことなど一度としてなく、まるで彼らの中にいるのが恥ずかしいと言わなければなりません。彼が免状とともに贈ったバルドの称号を真に受け、われらが田舎の言語を純化し、日に日に消えて行く古の詩歌や口頭伝承を蘇らせんと多少なりとも努力をした人々のために、彼がしたことは何ひとつありません。それどころか、この人はこうした貴重な試みを嫉視しているのではないか、自分以外の人間がブルトン語やブルターニュ文学について大いに話し書く権利を認めていないのではないか、とさえ思いたくなるほどなのです⁽³⁹⁾。

リユーゼルが言うように、それまで「ブルターニュ協会」の会員が集まったことは、わずかに一度しかなかった。しかも、そこには会長であるラヴィルマルケの姿はなかった。つまり、すでに言ったように、そもそもこの会はなんら実体のない会だったのであり、その唯一の仕事と言えば、会長が適当な会員を見つくるって免状を渡すことだけだったのである⁽⁴⁰⁾。

しかし、だからと言って、この会に存在意義がまったくなかったわけではない。それどころか、『バルザズ・ブレイス』がブルターニュ文学に与えた影響を考えれば、その著者を長とする組織の存在は、それだけで少なからぬ意味をもつものであった。実際、この時代のブルトン語による出版物の興隆には目覚ましいものがあつた。しかも、その中心にいたのは、ほかならぬ「ブルターニュ協会」の会員たちだったのである。ブルトン語で書かれたものといえば、宗教関係の書物を除けば歌の刷り物しかなかった『バルザズ・ブレイス』以前の時代と比べれば、それは文字通り雲泥の差だったのである。

そして、リューゼルが「ブルターニュ協会」に実質的な役割を期待するようになった理由も、もとはと言えば、ブルターニュにおけるこうした文学活動の高まりが背景にあったからであった。手紙はこう続いていた。

こうしたなかで、「ブルターニュ協会」の会員の幾人かは、考えを同じくする他の数人とともに、このいい加減で、ほとんど滑稽とも言うべき状況を打開すべく、「会長」に真摯かつ積極的に会のことを考えてもらうべきではないか、さもなければ辞めてもらおう、ということになったわけです。したがって、目下の問題は、会の改組であり、また新たな会長の選任です。ラヴィルマルケに会長職を退いてもらうという点に関しては、皆―あるいはほとんど皆―の意見は一致しているのですが、では代りに誰がなるのかということになると、いまだに意見の一致が見られません⁽⁴¹⁾。

つまり、リューゼルたちが企てたのは、現会長ラヴィルマルケの更迭だったのである。新たな会長の候補者としては、ルゴニーデックの高弟トルードなど三人の名前が挙がっていたが、なかでも有力視されていたのは、ブルトン語の普及に深い理解のあったサン・ブリウーの司教であった。もちろん、司教を会長にすれば、聖職者ばかりが優遇されることになるのではという懸念はあった。が、「度量の広い人物である」というルナンのお墨付きにも後押しされ、改革派のメンバーたちは本格的に彼との交渉に乗り出そうとしていた。

しかしこの計画は、結局、司教との接触すら得られぬまま、ほどなく頓挫してしまふ⁽⁴²⁾。リューゼルは言う。「私や友人たちは、ラヴィルマルケの息がバス・ブルターニュ地方の修道院すべてにかかり、その善意を曇らせているのだと思っています⁽⁴³⁾」。結局、彼らは「ブルターニュ協会」の改革を諦め、その代わりに宗教的な要素を排した、まったく新しい会を立ち上げることを考える。翌一八六七年二月、リューゼルはルナンにこう書き送る。

昨夏お話しいたしましたブルターニュ協会を作るという件は（例によって聖職者の悪意のために）成功しませんでしたが、いま類似のものを立ち上げようと頑張っています。目的はもっぱらナショナルなものであり、また学問的なものです。どこからも拘束を受けませんし、メンバーのなかには聖職者もいません。（……）つまりそれは、古い辞書や古い詩や未発表の「聖史劇」や文法書といったような、われわれの古いブルトン語に関わる、興味深く、有用かつ貴重な資料の出版のための組織なのです⁽⁴⁴⁾。

手紙は続けて、この組織によって近々出版が予定されている書物として、『カトリコン』*Catholicon*を挙げていた。この『カトリコン』とは、ブルターニュの聖職者たちにラテン語とフランス語を習得させることを目的として、一四九九年にジャン・ラガドゥック Jehan Lagaduc によって出版されたブルトン語・ラテン語・フランス語辞典であった。新たな版の校訂の任を負ったのは、フィニステール県の古文書保管人ルネ・フランソワ・ルメン René-François Le Men。そして、一八六七年に出版されるこの新しい『カトリコン』こそ、「バルザズ・ブレイス論争」において、ラヴィルマルケに投げつけられた最初の、そしておそらくはもっとも衝撃的な爆弾だったのである。

（つづく）

註

- (1) *Correspondance Luzel-Renan*, Presses Universitaires de Rennes/Terre de Brume, p.41.
- (2) *Ibid.*, p.50.
- (3) *Ibid.*, pp.50-51.

- (4) *Ibid.*, p.49.
- (5) Francis Morvan, *Francis-Marie Luzel, Enquête sur une expérience de collectage folklorique en Bretagne au XIX^e siècle*, Terre de Brune-Presses Universitaires de Rennes, 1999, pp.113-114. その中の同僚のひとりには、後にポール・セビユ Paul Sébillot と並んでオー・ブルターニュ地方の代表的な民俗学者となるアドルフ・オラン Adolphe Orain であった。
- (6) *Correspondance Luzel-Renan*, pp.63-64.
- (7) 同じくひとつ訂正しておきたい。前回の「ラヴィルマルケとリュージェル(三)」(鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第60号、二〇〇四年、四六一-四七頁)において、筆者はリュージェルの職歴について、「最初に教職に就いたのは一八四八年、二十七歳のときだった。(……)最初に彼が赴任したディナンのコレージュは」と書いたが、彼が最初に教職に就いたのは、正しくは「一八四七年、二十六歳のとき、ロリアンのコレージュ」である。身分は「生徒監督」であった。このことは、F. Morvan, *op. cit.*, p.75 でも確認されている。
- (8) F. Gourvil, *Théodore-Claude-Henri Hersart de la Villemarqué et le «Barzaz-Breiz»*, Oberthur, 1960, p.150.
- (9) *Ibid.*, pp.148-149.
- (10) F. Morvan, *op. cit.*, p.84. 彼はまたポントワーズでは収集のできぬ状態にあったとき、『バルザズ・ブレイス』の詩を翻訳して無聊を慰めてもらったという。
- (11) F. Gourvil, *op. cit.*, p.150.
- (12) *Ibid.*, p.143-144; F. Morvan, *op. cit.*, p.124. なお、Kermarker とは Villemarqué のブルトン語風の読み方である。
- (13) *Ibid.*, p.144-145; *Ibid.*, p.124.
- (14) F. Gourvil, *op. cit.*, p.145.
- (15) *Correspondance Luzel-Renan*, pp.61-62
- (16) 拙論「ラヴィルマルケとリュージェル(一)」、鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第57号、二〇〇三年、八五頁参照。
- (17) この点について、たとえば Anatole Le Braz は、この時代の「ブルターニュ協会」のメンバーの間には、何であれブルトン語で発表する際には、その前に必ずアンリ神父の添削を仰ぐことが慣例になっており、リュージェルもそれに従ったのではないかと推測

- している。Cf. *Magies de la Bretagne*, collection Bouquins, Robert Laffont, p.702.
- (18) この「序文」は、同じ一八六三年に *Les mystères et le théâtre breton* の表題で *Revue de Bretagne et de Vendée* 誌上に発表された論考に、若干の加筆を施したものだ。た。
- (19) もちろん、その裏にはルナンの後押しがあったらしい。詳細は、F. Morvan, *op. cit.*, p.142.
- (20) Le Braz が『旅日記』を発表したのは、一九一〇年、*Annales de Bretagne* 誌上におこつてゐる。なお、リュールゼルの直筆ノートは現在行方不明であり、したがって一九九四年に F. Morvan によつて刊行された *Journal de route*, PUR-Terre de brume, 1994 のこのルブラスによつて発表されたコピーに基づいてゐる。Morvan によれば、このコピーには明らかな欠落があり、また時間的な順序にも混乱があるといふ。Cf. *Journal de route*, pp.26-27.
- (21) Anatole Le Braz, *Le Théâtre celtique*, in *Magies de la Bretagne*, collection Bouquins, Robert Laffont, p.708.
- (22) *Correspondance Luzel-Renan*, p.71.
- (23) *Ibid.*, p.73.
- (24) F.-M. Luzel, *Bapred Breizad*, Morlaix, Haslé. Nantes, Forest et Grimaud. Paris, Hachette, 1865, p.55.
- (25) *Ibid.*, p.76
- (26) F. Gourvil, *op. cit.*, p.156.
- (27) F. Morvan, *op. cit.*, p.274.
- (28) F. Gourvil, *op. cit.*, p.156.
- (29) *Ibid.*, pp.81-82
- (30) *Ibid.*, p.82
- (31) Théodore Hersart de la Villemarqué, *Le Geand Mystère de Jesus*, Préface, Librairie Academique, 1865, pp.I-II.
- (32) 著者はその中で、ウェールズとコーンウォールの各地域の演劇について概観した後、ブルターニュのそれに触れていたが、アイルランドとスコットランドについては、独自の演劇を残さなかつたという理由で言及しなかつた。
- (33) T. H. de la Villemarqué, *op. cit.*, *Le théâtre chez les nations celtiques*, pp.cxxxii-cxxxiii.

- (34) *Ibid.*, p. cxv.
- (35) *Ibid.*, p. cxxxiii.
- (36) *Ibid.*
- (37) F.-M. Luzel, *Sainte Tryphine et le roi Arthur*, Th. Clairet, 1863, pp. XXXIV-XXXV.
- (38) *Ibid.*, p. XXXIX.
- (39) *Correspondance Luzel-Renan*, pp. 104-105.
- (40) 協会の改組がようやく現実になるのは、一八六九年である。そのときでも、長年書記を務めたシャルル・ドゴールが素直に自らの無為を認めていたということだから、文字通り何もしていないに等しかったのだろう。定期的な集会の開催や機関紙の刊行が決まったのも、そのときが初めてだった。cf. F. Gourvil, *op. cit.*, pp. 165-166.
- (41) *Correspondance Luzel-Renan*, p. 105.
- (42) この事情を、リューゼルは一八六六年九月二十日付の手紙でこう説明する。「サン・ブリウーの司教は書面では何も約束していませんでした。あったのは口約束だけで、要するに確実なことは何もなかったわけです。それでも私たちは、彼に正確な返答と会合の日時を知らせて欲しいと二度も手紙を書きました。これまでのところ何の返答もありません。もう一ヶ月以上経っているのです
が」(*Ibid.*, p. 109)。
- (43) *Ibid.*
- (44) *Ibid.*, p. 116.